

指導計画づくりに活かすための保育記録のあり方(1)

—先行文献の整理を中心に—

A Study on the State of Child Care Record for Utilizing Curriculum and Teaching Planning(1)

—Focusing on the Arrangement of Prior Research—

瀧川 光治*

Koji TAKIGAWA

抄 録

本研究は、保育記録のあり方についての先行研究・文献において指摘されている知見を、指導計画づくりに活かすという視点から整理したものである。「個々の子どもの育ち」「クラス集団の育ち」「遊びの方向性」「自らの保育実践」の振り返りがあり、それに伴う記録がエビデンスとしてあるからこそ、「指導計画」に記述している「ねらい」「内容」「環境構成」等を振り返り、自己評価が可能であることを指摘し、そのことを踏まえて「指導計画」に活かすためには、日々（少なくとも週単位）の「保育記録」「個人記録」を残すことが基本であるが、さらに「環境図記録」「ウェブ型記録」「エピソード記録・記述」等といった他の記録方法も用いてみることにつなげていくことが必要であることを指摘した。

I 問題設定

「保育を振り返り、記録すること」は、指導計画作成や保育内容を構想していくにあたって欠かせないステップであり、保育実践の基盤になるものである。保育の質や専門性を維持・向上させていくためには、園外研修の受講や、各園の園内研修・保育カンファレンスなどの組織的な取り組みと同時に、各クラス担任における保育実践を「振り返り、記録すること」「自己評価すること」が必須である¹⁾。

とくに保育を振り返ることは、「自らの保育実践の振り返り」及び「子どもの変容する姿を捉えること」の2つの側面(厚生労働省,2008)¹⁾、あるいは「教師の指導の改善」及び「幼児の発達の理解」の2つの側面(文部科学省,2008)²⁾から捉えることが重要である。とくに「子どもの変容する姿を捉える」「幼児の発達の理解」は、ある活動から次の活動の多様な展開を如何に想定して、学びや経験をつないでいくか(文部科学省,2008；無藤隆,2009)³⁾の検討も含めて、振り返り・自己評価を指導計画や保育実践に活かしていくことがこれからより強く求められる時代となってきた。また、こ

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

ここでいう保育における自己評価とは、「保育の中で幼児の姿がどのように変容しているかをとらえながら、そのような姿が生み出されてきた様々な状況について適切かどうかを検討して、保育をよりよいものに改善していくための手掛かりを求めること」(文部科学省,2010)⁴⁾であり、その意味では、保育実践の「振り返り」と「自己評価」は同義的な使い方がなされていると考えられる。

以上のように、現代の保育界において「振り返り、課題を見つけ、改善を図るサイクル」(秋田,2009)⁵⁾が重要不可欠なものとなってきた。保育は「子ども理解→計画→実践→振り返り・自己評価→新たな子ども理解→計画の修正→・・・」というサイクルの中で営まれ、そのサイクルのどの段階を取り上げても、全体の循環の中で、他の要素と切り離せないものである。また「保育記録」「保育日誌」を記述し続けることが、「振り返り・自己評価」を深めることにつながり、サイクルの中での「新たな子ども理解→計画の修正→・・・」(子どもの育ちを支えるための子ども理解の深まりと、指導計画作成や保育内容を構想し保育実践の改善すること)に寄与できる。そのため、そのサイクルの中の検討課題を絞るためにも「保育記録・保育日誌のあり方・内容および具体的な方法」ということに問題を限定して分析することとする。

Ⅲ-2・3・4 で詳述するが、「保育の記録」のあり方については、日々の保育日誌と結びつけるものとしては、今井和子(1999)『保育に生かす記録の書き方(改訂版)』(ひとなる書房)が詳しく、その中で視点や方法等が具体的に提示されている。それらは他の日々の保育を保育日誌や日案・週案などの「反省・評価」欄にどのように振り返って記述すればよいかといったポイントが書かれた書物や、そのような記録を「幼稚園児童要録」「保育所保育児童要録」につなげていくために記述ポイントについての多くの書物に引用・参考文献に記載されている。また、河邊貴子(2005)『遊びを中心とした保育 - 保育記録から読み解く「援助」と「展開」 - 』(萌文書林)は、河邊自身の保育記録の工夫が紹介され、目的に応じて記録用紙を使い分けることなどが指摘され、記録の意義だけでなく、子ども理解、保育の構想のための記録のあり方が紹介されており、また前述の日本保育学会の誌上「保育フォーラム」や「大会シンポジウム」でも話題提供者を務めている。

その他、さらに日々の保育実践を深めていくための事例・エピソード記述型(鯨岡,2005,2009 など)、保育マップ(新開・岡本・庄籠ら,2007)、環境図記録・保育マップ型記録(河邊,2005,2008 など)、チェックリスト型やSICS(秋田・小田ら,2010)などといった様々なものが提案されている。しかしながら、それらは目的や保育経験年数に応じての有用性の違いがあると考えられる。

それでは、保育記録にはどのような種類・形態があり、また記録に書きとどめる内容はどのようなものが必要とされるのであろうか。また、記録のための保育記録ではなく、子ども理解を深め、保育実践を改善するためには、保育記録においてどのような視点で記録し、蓄積していくことが有効なのであろうか。そこで本研究においては、それらの先行研究や文献を整理し検討することを通して、「保育者自身が自らの保育実践を振り返り、自己評価するため方法や記録」についての全体構造を明らかにし、どのような保育記録の取り方をすれば、より深く保育を振り返り、指導計画づくりに活かすことにつながるのかを明らかにする。

II 研究方法・分析の枠組み

II-1 先行研究・文献の範囲とデータ抽出について

(1) 先行研究・文献の範囲

2008年3月の『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』の改訂を反映している保育現場に向き書かれた書物、および保育者養成校におけるテキスト類(主として、保育の日誌・記録・自己評価・振り返りについて書かれているもの)をベースに、2001年以降の過去10年間の学術論文(Ciniiにおいて「保育 記録」「保育 振り返り」「保育 自己評価」のキーワードにより検索されたもの)も参照した。

(2)上記の文献より、以下の3種類の記述の該当箇所を抜き出し、整理を行う。

- ①「保育の振り返り」および「保育記録を取る意義」の抽出
- ②「保育記録の内容・方法・種類」の抽出
- ③「(自己)評価の観点・視点および方法・種類」の抽出

II-2 分析の枠組み

(1)分析のための理論的枠組みとコーディング

前述のように保育の振り返りには、2つの側面「(A)自らの保育実践の振り返り／教師の指導の改善」「(B)子どもの変容する姿を捉える／幼児の発達の理解」がある。文部科学省(2010)⁶⁾によると、前者(A)については、評価・反省の視点として「教師のかかわり方は適切であったか」「環境の構成はふさわしいものであったか」「あらかじめ教師が設定した指導の具体的なねらいや内容は妥当なものであったかなど」が示されている。また、後者(B)については「教師が幼児の行動を見るときに、否定的に見ないで、成長しつつある姿としてとらえる」「そのためには、様々な幼児の姿を発達していく姿としてとらえる／その幼児の持ち味を見つけて大切に／その幼児の視点に立つことが大切」とし、「活動の意味」「発達する姿」「集団と個の関係」を捉えることについて示され、「記録の工夫」として「エピソードを記録する」「週案、日案の用紙を使う」「個人票に視点の欄を設ける」ことや、「記録から読み取ること」として「個々の幼児の生活の変化」「幼児の姿を生み出した状況」「教師自身のかかわり」について示されている。

一方、厚生労働省(2008)⁷⁾によると、前者(A)については、「保育士等は指導計画に書かれたねらいと内容、環境構成、保育士等の援助などが適切であったかなど“保育の過程”の全体を振り返ります」「指導計画をはじめ保育実践記録などをもとに、保育士等の間での省察を通じて、保育の目標やねらいの達成状況、課題になっていることを明らかにしていく」「さらに保護者との連携が十分に図られているかについても振り返る」と示されている。また、後者(B)については「個々の育ちをしっかりと捉える専門性が何よりも大切」という前置きのもと、「生活や遊びの中で目に見えにくい心の動きなどの内面の育ちをとらえる」「どのようなことに興味や関心を持ち、どのような活動に取り組もうとしているのか・取り組んでいるのか」「保育の環境や、子ども同士及び保育士等との関係など、周囲の状況との関連も視野に入れながらとらえる」ことなどを踏まえて、「ねらいと内容の達成状況を評価する」ことが示されている。

そこで、これらを踏まえて、上記②③については下記の表 1 により、コーディングを行う。

表 2-1 分析のためのコーディング表

保育の振り返りの 2 つの側面		左記に含まれる要素(A1 等の記号はコーディング記号)
A	<ul style="list-style-type: none"> 自らの保育実践の振り返り 教師の指導の改善 	A1「指導計画(日案, 週案, 月案, 期案, 年間指導計画)」に基づく振り返り及び記録にかかわること。
		A2「保育実践における子どもとの関わり(援助・環境構成)」の振り返り及び記録にかかわること。
B	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの変容する姿を捉えること 幼児の発達の理解 	B1「個々の子どもの育ち」の振り返り及び記録にかかわること。
		B2「遊び・活動の内容・育ち」の振り返り及び記録にかかわること。
		B3「クラス集団の育ち」の振り返り及び記録にかかわること。
C	・その他	C 上記 A, B とは違う要素あるいは複合的要素で分離が難しいもの

なお、上記①の「保育の振り返り」および「記録を取る意義」については、そのまま分析を行う。

(2)それらを比較検討し考察を加えることで、現代的課題・動向を明らかにする。

III 結果

III-1 概括

(1)記録を取る意義、保育における評価の意義

記録を取る意義については、寺田ほか(2009)⁸、増田ほか (2009)⁹、小田・神長ほか(2009)¹⁰などを参照すると、「子どもの現状理解と、子どもの発達の連続的な理解のため」「自分の保育を振り返り、反省・評価するため」「次の保育の計画へつなげていくため」の概ね 3 つの意義が示されている。さらに、保育における評価の意義については、神長・塩谷ほか(2009)¹¹、小田・青井ほか (2009)¹²などを参照すると、「子どもに対する評価として、子どもがどのように変容してきたかを評価して、よりよい指導を生み出す手掛かりを求める」「保育に対する評価として、子どもの変容を生み出した背景にある保育者のかかわりや環境構成を評価して、よりよい指導を生み出す手掛かりを求める」の概ね 2 つの意義が示されている

(2)記録の方法・視点

ここでは記録の一般的なものを取り上げる。主な記録としては、寺田ほか(2009)⁸、小田・神長ほか(2009)¹⁰などを参照すると、概ね次の表 3-1 のように整理できる。

表 3-1 記録の方法・視点についての一般的な整理

振り返り及び記録のコーディング		記録の種類
A	A1 指導計画(日案, 週案, 月案, 期案, 年間指導計画)	日案や週案の中の記録, 日の記録・週の記録・期の記録
	A2 保育実践における子どもとの関わり(援助・環境構成)	エピソード中心の記録, 5W1Hメモ, 環境図
B	B1 個々の子どもの育ち	個人記録, つぶやきメモ, 幼児の個人カード, 5W1Hメモ
	B2 遊び・活動の内容・育ち	エピソード中心の記録, 活動のまとまりごとの記録, 環境図
	B3 クラス集団の育ち	エピソード中心の記録, 環境図
C	C その他	子どもを見る目を養い, 保育の質を高める記録・・・子どもの言動の裏にある原因や思い, その子の特性を推察する, 行動の意味→かかわり方の振り返り→その子の変化という保育者のかかわりをおさえた記録

Ⅲ-2 日々の保育の振り返り・記録

(1)日々の保育の振り返りの意義について

ここでは、Ⅲ-1に挙げたことにも重なるが、さらに「日々の保育の振り返り・記録」に焦点を当てて文献を整理する。「自分が子どもにした援助が適切であったかどうかは、子どもの姿を通して判断するしかない。援助によって子どもがどのような経験をすることができたのか、その経験がどのような育ちにつながったのかという視点で捉えることで、その援助を評価することができる」(阿部・中田ほか,2010)¹³⁾、あるいは「日常の保育を振り返り、幼児の活動の姿と教師の指導・助言などと関連付けて評価することは、幼児に対する理解を深め、指導の方向を見出し保育を改善することにつながる」(小田・神長ほか,2009)¹⁰⁾というように「保育者の援助や指導の方向性」や「幼児理解」の視点から意義を考えることもできる。

(2)日々の保育の振り返り・評価の視点について

日々の保育の振り返り・評価の視点については、様々な文献で具体的に示されているが、その代表的なものを整理し、コーディングごとに整理すると次表 3-2 のようになる。

表 3-2 日々の保育の振り返り・評価の視点についての整理

A1	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいと内容は妥当なものであったか ・環境の構成はふさわしいものであったか ・保育者の援助(についての記述)は適切であったか
A2	<ul style="list-style-type: none"> ・全体の時間の運びや幼児の活動の結果はどのような状況であったか、保育者自身は何をしたり何を言ったりしたか ・思いあたることがらを中心に、自分の環境の構成や援助と幼児の関係についても記録する ・子どもが集中しなかったのは自分の保育の設定や方法に問題がなかったかと考える
B1	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日、保育の終了後に思い起こしてみ、その日の特徴的な幼児の様子をできるだけ多く記録する ・それぞれの幼児が何をしていたか、全体の時間の運びや幼児の活動の結果はどのような状況であったか-「遊びへの取り組み」「人とのかかわり」「クラス全体(大きな集団)とのかかわり」-を記録する ・個人記録として、「生活や心身の健康に関すること」「遊びや活動の姿」を記録する ・個の特性(興味を示す対象、行動の仕方、表現の仕方、自己課題のもち方、生活行動のとり方)を記録する
B2	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びへの取り組みとして「興味関心、意欲、環境へのかかわり」を記録する
B3	<ul style="list-style-type: none"> ・どんな人間関係が見られたか(保育者に対して、友達に対して、取り巻く様々な人に対して)の人とのかかわりを記録する ・クラス全体(大きな集団)とのかかわり・・・所属する集団への安定感、帰属意識など ・集団とのかかわり(自分の世界、相手との世界、周囲の人々とのかかわり)
C	<ul style="list-style-type: none"> 〈次への保育の課題・見通し、その他〉 ・自分の感想や意見、次の保育への見通しなどを書き添えて残し、問題点と改善策を考える ・個人記録として「家庭との連携」

(3)日々の保育日誌の「反省・考察」の書き方のポイント

まず、文章表現については、記録を書く際の心がけとして、「①その場にいた保育者だけでなく、基本的には誰にでもわかるような表現を読みやすいものにする ②その場面がはっきりイメージできるように書く ③発達の姿、特徴がよく見えるように書く ④子どもの発話や会話、やりとりなどは具体的に詳しく書く ⑤保育者の願いやその時の心情なども織り込んでいく ⑥保育者として感じた反省点や改善点などにも触れる」(神長・塩谷ほか,2009)¹¹⁾といったことが指摘されている。

そして、上記②③④⑤に関連して「子どもの姿」「保育者の読み取り・対応」「子どもの反応」保

育者の考察」の流れで日誌に記述するとよいことが提案されている。たとえば、「子どものしようとする姿に焦点を当てて、子どもの姿をできるだけ具体的に書く」、「それを保育者はどうとらえたか(受け止めたか)、どう対応したのか(関わった)を書く」、そして「子どもの反応はどうだったか」、それを踏まえて、「子どもの変化を保育者がどのように読み取ったかを捉え、それらについて保育者はどう考えたか、反省、考察を書く」という流れで日々の保育日誌を書くことが指摘されている(今井,1999; 増田ほか,2009)¹⁴。

Ⅲ-3 週・月・期・年の保育の振り返り・記録

(1)中・長期の保育の振り返りの意義

Ⅲ-2 においては「一日の記録・振り返り」について述べてきたが、「日常の保育の評価を積み重ねてみると、一人ひとりの幼児の変容や学級集団の育ちなどとともに指導の課題がみえてくる」(小田・神長ほか,2009)¹⁰、「毎日の子どもの姿からはその育ちが見えにくいことがある。しかし、ある一定の期間で子どもの姿を捉えてみるとその育ちが見えてくる。日々の記録から、月あるいは期など、ある一定の期間ごとに子どもの記録をまとめていくことで、子どもの育ちを捉え、翌月・期の保育の計画につなげていく」(増田ら,2009)⁹という指摘のように、保育の場においては子どもの育ちを長期的な視点から捉えるためにも、一定の期間を設定しての中・長期の保育の振り返りも必要である。

(2)中・長期の保育の振り返り・評価の視点について

河邊 (2008)¹⁵では「長期と短期では計画の対象となる期間が異なるので、子どもをどう理解するかという時間的な枠組みも異なる」と指摘されている。そこで、Ⅲ-2と同様に、いくつの文献からその点を踏まえて抜粋し、さらにコーディングごとに整理すると、次表 3-3 となる。

表 3-3 中・長期の保育の振り返り・評価の視点についての整理

A1	週	「ねらい」・・・週のねらいを一人ひとりがどれだけ達成したかという評価ではなく、クラス全体は週のねらいの方向で指導を展開してきたが、その流れの中で一人ひとりがどう変わり育ってきたのかということをとらえる
	月	「環境」・・・週案の評価では、環境のあり方を見直すことも必要で、環境を見直す際には、ねらいや内容にそった環境の見直しだけでなく、この時期の子どもの生活を豊かにしていく周囲の環境をとらえることも必要
	年	・設定したねらいが達成できたか、環境構成は適切だったか ・内容に書いたことを子どもが経験できたのか、経験したねらいまではいかなかったのか、次の期につなげていきたいということ ・年度末における長期の指導計画の評価の視点として「幼児の発達の過程」「ねらい・内容」「よさや可能性を活かす指導と環境の構成(幼児の自分らしさの発揮、肯定的評価)」
A2	週	・それぞれの幼児への自分のかかわりについての反省をし、次週への援助の考えをまとめる。 ・週末にハートくに記録の少ない幼児を拾いだし、なぜ少なくなったのかを考えながら次週の援助の工夫を考える。
	月	・子どもの状況に応じて柔軟な保育ができたか、子どもを主体とした保育がなされたか ・養護的な配慮がなされていたか ・援助方法、援助技術は適切だったか ・発達過程に沿った、また発達段階に必要な経験をさせられたか ・子どもの心の育ちや意欲、取り組む過程への配慮は適切だったか

	期 年	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者のかかわりや配慮の仕方はどうだったのかなどを書いて次の期につないでいけるように工夫する ・(個別の子どもに対して)どういった関わりが必要なのか明確に書く
B1	週 月 月・期 期 中/長期 年	<ul style="list-style-type: none"> ・週末にそれぞれの幼児ごとに、記録されたことがらをピックアップし、それについての考察を深める。 ・とくに記録の少ない幼児を拾いだし、なぜ少なくなったのかを考えながら次週の援助の工夫を考える。 ・月の記録は、日々の記録を読み返して整理していく。子どもが興味をもって取り組もうとしていることや取り組んでいること、その中での子どもの育ちや必要な援助、また発達の課題となっていることなどに注目する(なにに興味があるのか具体的に書く、発達の課題や援助がわかるようにかく) ・幼児の育ち(遊びへの取り組み)を記録する ・その期間に子どものどのような面がどのように育ったのか、子どもの育ちが見えるような記録 ・子どもの育ちはどうだったか、個人記録を発達の期ごとに観点を決めて整理し、発達の見通しを持って保育をする(自己の育ち、生活の組み立て、遊びへの取り組み・言葉) ・行動が変化した背景にある内面の育ちを記録から読み取る ・中・長期の期間の区切りごとに、一人ひとりの幼児の変容や指導の課題について検討する ・月の記録を並べてみると、1年間の子どもの成長を捉える事ができます。まずはどのような面が成長したのかについて書きとめる、成長のプロセスがわかるように書く
B2	週 期	<ul style="list-style-type: none"> ・「週と学期末における保育の評価の視点」・・・学級集団の育ち(遊びへの取り組み) ・個人記録を発達の期ごとに観点を決めて整理し、発達の見通しを持って保育をする(遊びへの取り組み・言葉)
B3	週 期 中/長期	<ul style="list-style-type: none"> ・週のねらいを一人ひとりがどれだけ達成したかという評価ではなく、クラス全体は週のねらいの方向で指導を展開してきたが、その流れの中で一人ひとりがどう変わり育ってきたのかということをとらえる ・週の記録は、個々の子どもをおさえるだけでなく、クラス全体を把握する ・小グループの中で子ども同士のかかわりを見ていき、それを翌週の週案に活かす ・個人記録を発達の期ごとに観点を決めて整理し、発達の見通しを持って保育をする(様々な人(教師・友達)とのかかわり) ・中・長期の期間の区切りごとに学級集団の育ちについて検討する
C	週 月 月・期	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭・地域との連携 ・前月の反省、評価は生かされていたか、 ・保育者間で必要な連携ハートれていたか ・必要な記録を残すことができたか ・保護者との連携は十分に取れていたか ・どのように育っているかということだけではなく、今後どのように育っていくのか、あるいは育ってほしいのかという子どもの今後の姿がイメージできる記録であることも大切 ・子どもの姿が見えてくると、今後必要とされる子どもへの関わり・援助を見通すことができるので、今後の子どもへの関わりや援助も書き添えておく

Ⅲ-4 多様な記録用紙を用いての振り返りや記録のあり方

Ⅲ-1・2・3で述べてきた日々の保育および、週・月・期・年の保育の振り返り・記録においては、基本的には日案・週案といった指導計画に基づく保育の振り返り・記録であった。ここでは、そのようなタイプの保育の振り返りや記録ではなく、「エピソード記録」「くもの巣(ウェブ)型記録」「環境構成図(環境図)記録/保育マップ/保育マップ型記録」などの多様な記録用紙を用いた振り返り・記録や、行事や研究保育等のある特定の活動における振り返りや記録のあり方について述べる。

(1) エピソード記録・エピソード記述

保育の分野において、保育日誌の記述とは違う文脈でより深い事例の検討とそれに基づく保育の改善のために「エピソード記録」という方法が使われる。

北野ら(2010)¹⁶⁾によると「エピソード記録では、そうしたある出来事に焦点を当てて、小さな物語を紡ぎ出すように、子どもを中心としてその行為や心の動きをおもに文章として描き出す。エピソード記録は、子どもの学びや育ちの一瞬を切り取るような方法であり、どのような場面で子どもの育ちの契機が見出されたかといったことを残しておくのに役立つ」と説明されている。

また、鯨岡・鯨岡(2009)¹⁷⁾は、従来の保育記録と鯨岡らの提唱する「エピソード記述」との違いを「これまでの保育記録はそこで起こった出来事を外側から眺めて客観的に描くという形になっていた／これに対してエピソード記述は、単に出来事のあらましを描くのではなく、保育者の目や身体を通して得た経験を保育者の思いを絡めて描くもの」と述べている。これは「目に見えない思いと思いが通じる経験や、思いと思いがずれて葛藤が生まれる経験を、保育者が自分の経験としてエピソードに描き出せば、その目に見えないものが第三者にも分かる(見えるものになる)と考え、エピソードを描くことを推奨してきた」という思いがあり、主体である保育者の内面をも含めて描くことを「エピソード記述」と定義している。そして、「エピソードを描くことが目標なのではなく、エピソード記述は自分の保育を振り返り、保育の質を高めるために必要なのだ」と、その意義を述べている。

(2) くもの巣(ウェブ)型記録

子どもの経験や活動の内容を構造的に捉え、それらのつながりを図式化したものに、くもの巣(ウェブ, web)型²⁾の計画(カリキュラム)がある。そのような子どもの経験や活動の内容、つながりを記録として生かしていくものが、くもの巣(ウェブ)型記録である。従来よりコンセプト・マップ(概念地図)やマインドマップという各要素間のつながりや派生状況を図式化する方法が保育界以外の各分野で知られているが、くもの巣(ウェブ)型の計画や記録も同様に、遊びや活動間のつながりや、経験させたいこと(その遊び・活動で経験したこと)等の要素間のつながりが目に見えるように図式化したものである。たとえば、角尾ら(2008)¹⁸⁾で紹介されている「プロジェクト型の保育」としての「4歳児の劇ごっこ」で、劇ごっこの構想段階と実践後の2種類の「くもの巣」(筆者注；ウェブ型の計画図とウェブ型記録)を対比している。

図1では、「4歳児の劇ごっこ」を中心にそれに関連する「製作」「絵本」等の活動を配置して、その活動の中で見られた子どもたちの様子が記載されている。このような図式化されたウェブ型記録を書くことによって、「4歳児の劇ごっこ」への取り組みの過程の中で見られた関連する活動の様子がどうであったかを「活動と活動のつながり」として把握することができる。

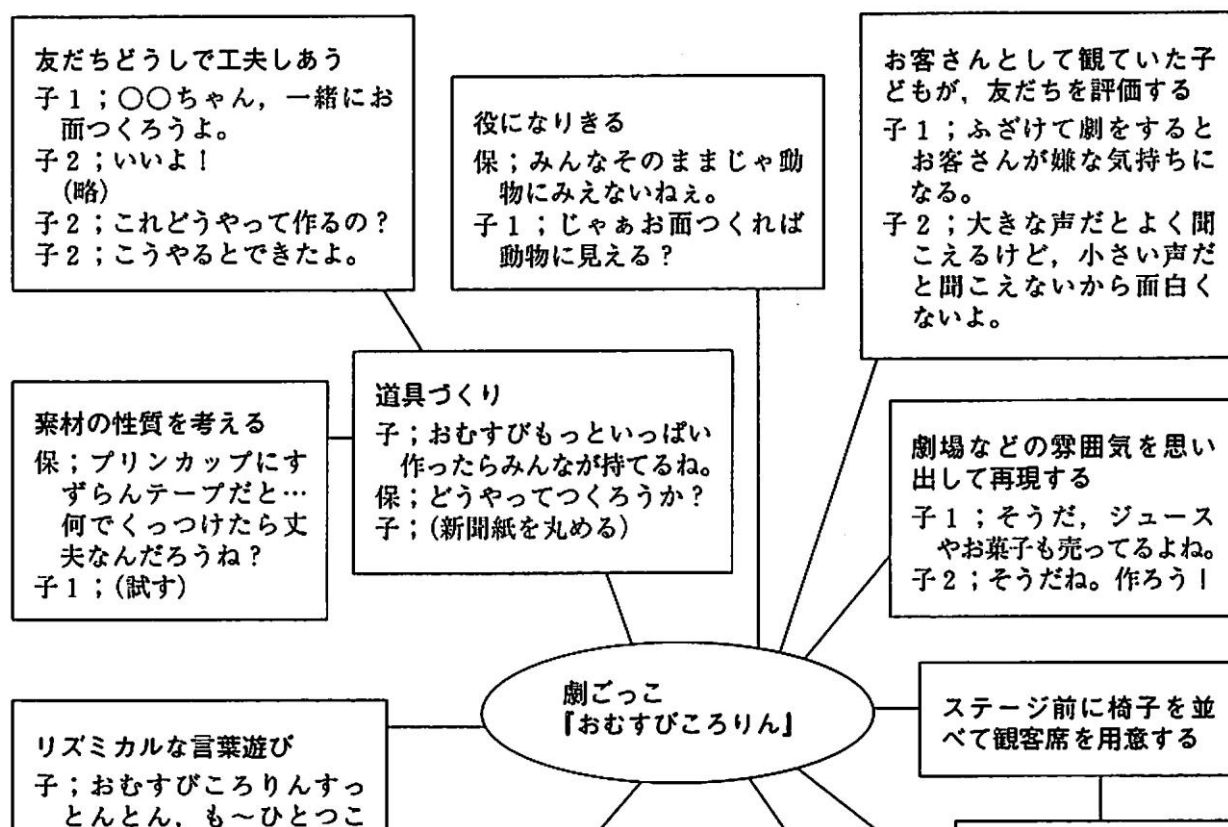


図1 ウェブ型記録の例(角尾ら,2008,p18)

(3) 環境構成図(環境図)型記録，保育マップ，保育マップ型記録

保育は，環境を通して行われることが基本であるが，園内環境，保育室環境の中で，子どもたちが環境にどのように関わっているかを「環境構成図」を利用して記録していくのが，「環境構成図(環境図)型記録」「保育マップ」「保育マップ型記録」と呼ばれるものである。

① 「環境構成図(環境図)型記録」

「環境図」を用いた記録については，単純には「保育室や園庭の環境図に「環境構成のポイント」「子どものイニシャル(名前)と，いた時間」を書き入れ，1日が終わったら「保育者の反省と明日からの援助」を赤文字で記入する」(寺田ほか,2009)⁸⁾ものとして捉えることができる。

② 「環境図記録」「保育マップ型記録」

河邊(2005)¹⁹⁾は，「同時進行で展開する複数の遊びを把握するのに，もっとも有効と思われる様式」として「環境図記録」を提案している。「紙面の中央に子どもが遊びや生活を展開する環境図をあらかじめ書いておき，そこに誰と誰が何をしているかを記入する」ものである(図2)。

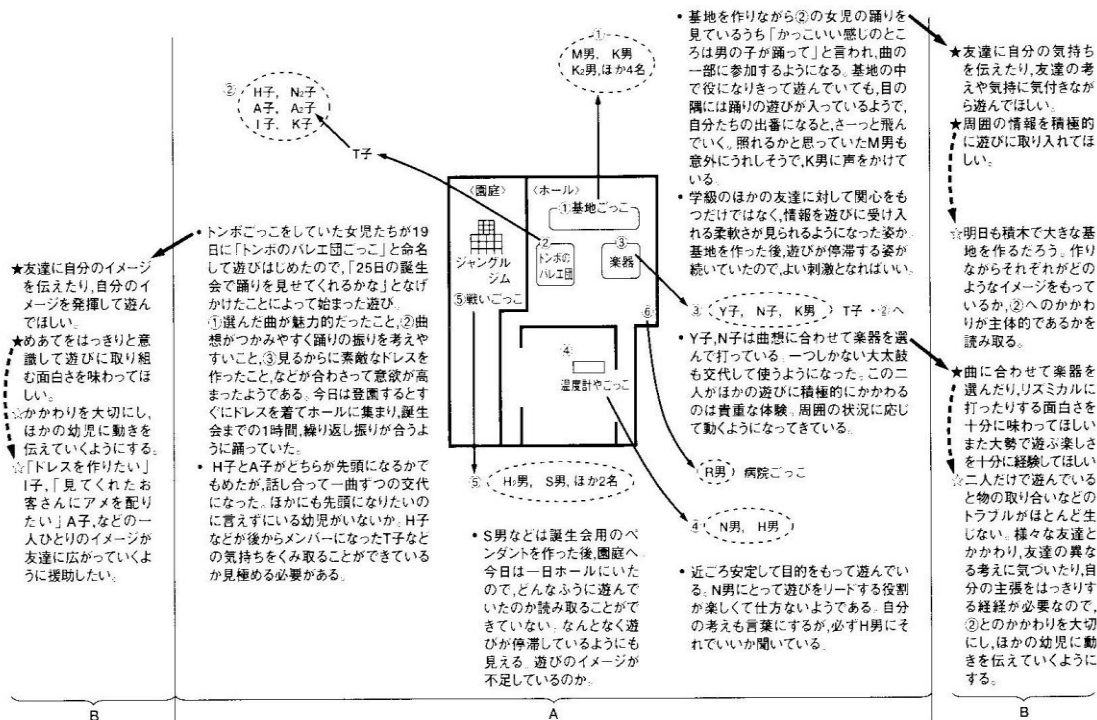


図2 環境図記録の例(河邊,2005,p73)

この様式のメリットとして河邊(2005)¹⁹⁾は「クラス全体の遊びを俯瞰することができるという点と実態把握から必要な経験の導き出しの道筋がクリアになるという点」をあげている。環境図記録においては、遊び理解において「空間、場のもつ意味を踏まえ、遊びを理解しようとする視点」「異なる遊びのなかに共通の育ちを読み取る視点」の2つが求められる。

その後、河邊(2008)²⁰⁾は「環境図記録」の名称を変更して「保育マップ型記録」を提唱している。それは「保育環境を図にした様式に遊びをマッピングし、そこで展開されている遊びの様子と子どもたちの経験を記述するもの」であり、「一人一人の遊びの様子と遊びの志向性を空間的にとらえようとしている点」に特徴がある(河邊,2009)²¹⁾。

③ 「保育マップ」

岡本・新開・庄籠(2007)²²⁾の「保育マップ」³⁾は、「園の環境図の中に子どもたちの遊ぶ様子をイラストで描き、そこに吹き出しをつけて具体的な様子を書き表した1枚の地図」を指し、「園内の場や遊具と子どもたちがどのように関わっているか(あるいは関わっていないか)、子どもが園内をどのように歩き回り遊びを展開していくのか、子ども同士はどのように関わって遊んでいるのかといった、子どもと場、子どもと遊具、子どもと仲間、子どもと保育者といった関係性をみる(ことができる)」ための保育記録である。

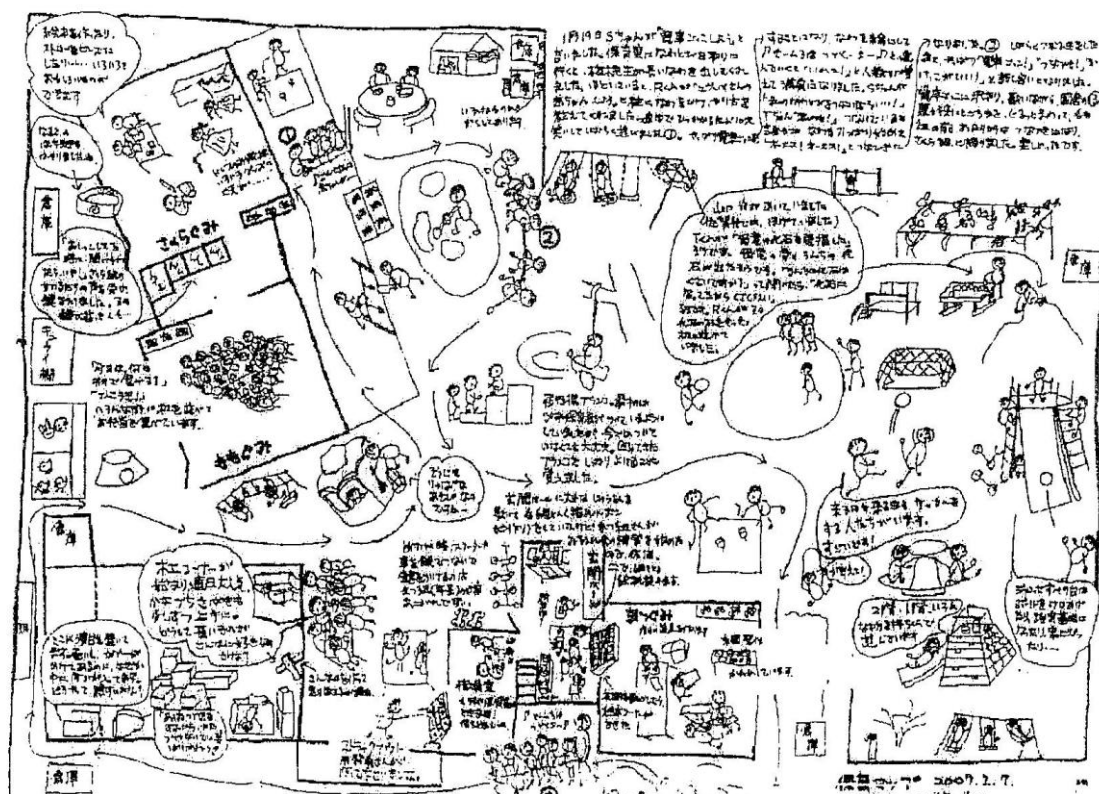


図3 「保育マップ」の例(新開・庄籠・岡本, 2007)

(4)その他の記録

その他の記録としては、小田・青井ほか(2009)¹²⁾において、「学びの評価と、アカウントビリティ(説明責任)としての評価」の方法として、「ポートフォリオ評価法」と「ドキュメンテーション」が紹介され、「これらの評価法は、評価を子どもや保護者とも共有しようとしているところに特徴がある」と指摘している。また北野ほか(2010)¹⁶⁾においては、「ドキュメンテーション」による記録と評価は、「文字・画像・音声などを駆使して、事実を余すところなくドキュメンタリーのように記録しようとする方法。エピソード記録もドキュメンテーションの1つと考えることができるが、ドキュメンテーションと呼ぶ場合、子どものプロジェクトを一定期間追うなど、比較的長い期間に及ぶ。ある活動を通じて、どのような過程を経ながら子ども一人ひとりあるいは子ども集団がどのように成長していくかをたどる際に有効な方法」として紹介され、「ポートフォリオ」による記録と評価は「記録を蓄積したまとめ。日々の記録・エピソード・子どもの作品・画像などを厚めのファイルにできるだけすべて蓄積していく。子どもの成長を蓄積する、いわば“育ちのポートフォリオ”と、保育者側の働きかけや保護者とのかかわりを記録してためていく“保育のポートフォリオ”を作成することができる」ことを紹介している。

また、ここまで述べてきた「記録」の前提となる保育中のメモについては、保育中にリアルタイムで詳細な記録をとることは難しいので、「メモ」を工夫して取ることもいくつかの文献で紹介され

ている。たとえば、寺田(2009)⁸⁾の「5W1Hメモ」では、「ポケットに入る小さなノートに“だれが／いつ／どこで／何を(した)／なぜ／どのように”と“だれと”を書き込めるような簡単な表を作成。記入したその日に10分くらいでよいので振り返りをしておく」ということが紹介されている。また、同じく寺田(2009)⁸⁾の「つぶやきを逃さないためのメモ」の工夫としては、「保育室の壁にクマ、チューリップ、ハートなどの形にカットした色紙シートを貼っておき、その端にそれぞれの子どもたちの名前を添えておき、“あつ、いいこと言った!”と思ったら、“何月何日、〇〇〇・・・”と子どもが発した言葉をその都度書いておく」ということが紹介されている。

IV 考察

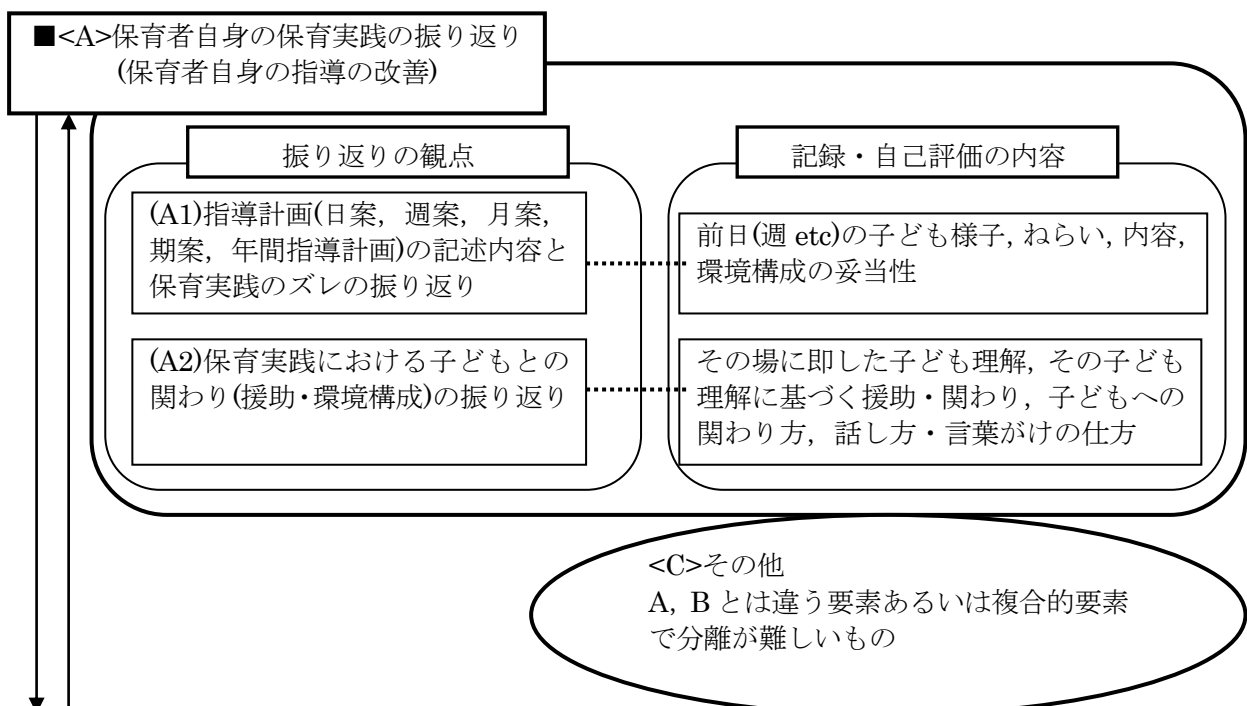
IV-1 保育実践の振り返り・保育記録・自己評価の全体構造

II-2 で示した「分析のためのコーディング表」およびIIIの結果を踏まえて、保育実践の振り返りと保育記録・自己評価の全体構造を整理すると、図4(次頁)のように示される。この図では「<A>保育者自身の保育実践の振り返り(保育者自身の指導の改善)」と「子どもの変容する姿を捉える(幼児の発達の理解)」のそれぞれに対して、「振り返りの観点」と「記録・自己評価の内容」を位置づけ、A1~B3およびCの6つの振り返りの観点に対して、どのような記録や自己評価が必要かの概略を示している。

IV-2 振り返りの観点と記録・自己評価の内容

(1) A1「指導計画の記述内容と保育実践のズレ」の振り返りの観点と記録・自己評価の内容

一般的な日案・週案・月案・期案では、「前日(週・月・期まで)の子どもの姿」と、それを踏まえた「ねらい」、そのねらいを達成するためのより具体的な「内容や活動(生活や遊び)」が、指導計画に記載されている。そのため、以下の表4-1のように、A1「指導計画の記述内容と保育実践のズレ」の振り返りの観点と記録・自己評価の内容が必要と考えられる。



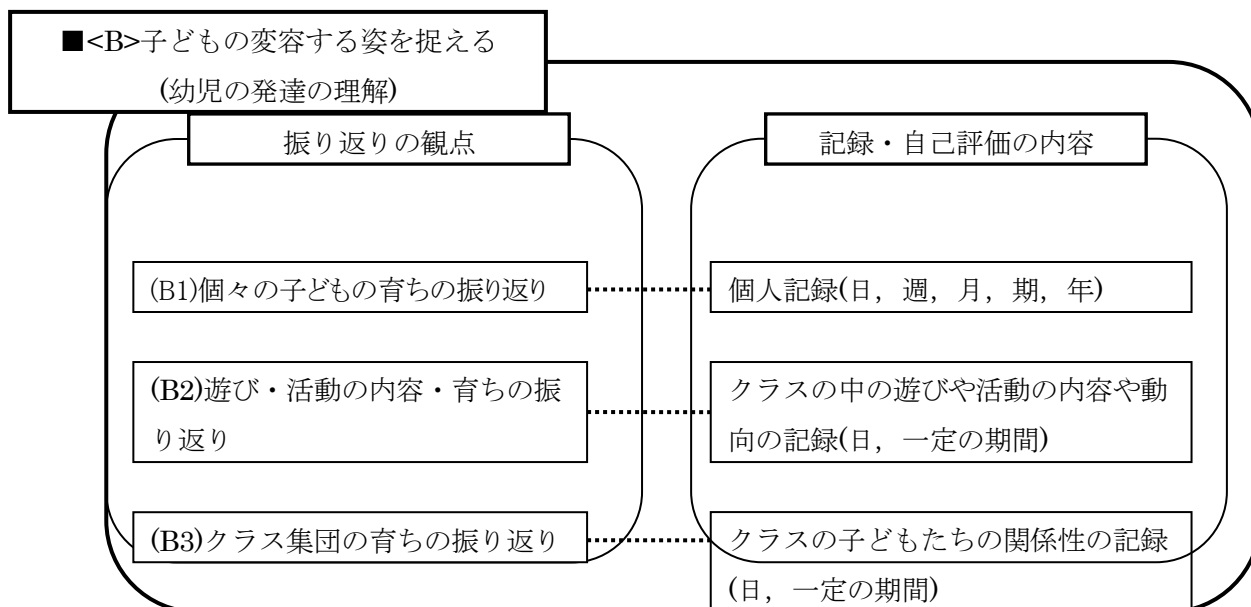


図 4 保育実践の振り返りと保育記録・自己評価の全体構造

表 4-1 「指導計画の記述内容と保育実践のズレ」の振り返りの観点と記録・自己評価の内容

振り返りの観点	<ul style="list-style-type: none"> ① その日(週・月・期)に設定したねらいが達成できたか ② その日(週・月・期)に設定したねらいと内容が妥当であったかどうか ③ その日(週・月・期)のねらいや内容にそった環境構成が適切であったか ④ その週(月・期)の子どもを生活を豊かにしていく周囲の環境についてはどうか ⑤ その月・期においてねらいや内容に書いたことを子どもが経験できたのかどうか ⑥ その日(週・月・期)保育者の援助の記述の適切性 ⑦ 年間指導計画の振り返りにおいては、次年度に生かすために「幼児の発達の過程の記述」「ねらい・内容」「子どものよさや可能性を活かす指導と環境の構成」の妥当性について振り返る
記録・自己評価の内容	<ul style="list-style-type: none"> ① その日(週・月・期)の「ねらい」「内容」「援助」「環境構成」が子どもたちにとってどうであったかを意識した記録が必要 ② とくに週・月・期レベルで環境構成のあり方についての記録が必要 ③ とくに月・期レベルでねらいや内容と子どもの実際の経験との関連性が見える記録が必要

(2) A2 「保育実践における子どもとの関わり」の振り返りと記録・自己評価の内容

その日(週・月・期)のそれぞれの幼児への自分のかかわりについての反省をし、翌日(週・月・期)への援助の考えをまとめることが必要であるが、そのための観点と記録・自己評価の内容は、以下の表 4-2 のようになる。

表 4-2 「保育実践における子どもとの関わり」の振り返りの観点と記録・自己評価の内容

振り返りの観点	<ul style="list-style-type: none"> ① 援助方法、援助技術は適切だったか(子どもの状況に応じて柔軟な保育ができたか、子どもを主体とした保育がなされたか) ② 子どもの心の育ちや意欲、取り組む過程への配慮は適切だったか、養護的な配慮がなされていたか ③ 発達過程に沿った、また発達段階に必要な経験をさせられたか ④ 全体の時間の運びや幼児の活動の結果はどのような状況であったか、保育者自身は何をしたり何を言ったりしたか
---------	---

	⑤子どもが集中しなかったのは自分の保育の設定や方法に問題がなかったかと考える
記録・自己評価の内容	①子どものしよとする姿に焦点を当てて、子どもの姿をできるだけ具体的に書く ②それを保育者はどうとらえたか(受け止めたか)、どう対応したのか(関わった)を書く ③子どもの反応はどうだったか ④子どもの変化を保育者がどのように読み取ったかを捉え、それらについて保育者はどう考えたか、反省、考察を書く

(3) B1 「個々の子どもの育ち」の振り返りと記録・自己評価の内容

園のシステムにより、日々あるいは週・月の単位で個々の幼児の個人記録を残している場合と、そうでない場合が考えられるが、表 4-3 では「日々の個人記録→週の個人記録→月・期の個人記録→年の個人記録」と個人記録を積み上げていく場合の観点と記録・自己評価の内容を整理する。

表 4-3 「個々の子どもの育ち」の振り返りの観点と記録・自己評価の内容(日々の個人記録あり)

振り返りの観点	<p><日々の保育></p> <p>① その日、それぞれの幼児がどのような様子で、何をしていたかを振り返る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・だれが、いつ、どこで、何を(した)、どのように、だれが一緒だったかということ振り返る ・その子の遊びの様子と人とのかかわりの様子や何に興味を示していたかを振り返る <p>② どうして(なぜ)そのような様子が見られたのかという内面について振り返る</p> <p><週の保育></p> <ul style="list-style-type: none"> ・週末にそれぞれの幼児ごとに、記録されたことがらをピックアップし、それについて思い起こして、考察を深める。 <p><中・長期></p> <p>①中・長期の期間の区切りごとに、一人ひとりの幼児の変容や指導の課題について検討する</p> <p>②行動が変化した背景にある内面の育ちを記録から読み取る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・月の記録を並べて、期あるいは1年間の子どもの成長を捉える
記録・自己評価の内容	<p><日々の記録></p> <p>①それぞれの幼児の様子や何をしていたかを記録する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活や心身の健康に関すること ・遊びや活動の姿(遊びへの取り組みの様子) ・人とのかかわり ・クラス全体(大きな集団)とのかかわり <p>②個の特性(興味を示す対象、行動の仕方、表現の仕方、自己課題のもち方、生活行動の取り方)</p> <p>③どういった関わりが必要なのか</p> <p><週の記録></p> <p>日々の個人記録をもとに、1週間の流れとして個々の子どもの遊びや人とのかかわり、クラス全体(大きな集団)とのかかわりについて整理する</p> <p><中・長期の記録>・・・週(月・期・年)の記録は、日々(週・月・期)の記録を読み返して整理していく</p> <p>①子どもが興味をもって取り組もうとしていることや取り組んでいること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なにに興味があるのか具体的に書く <p>②その期間の「子どもの育ち」「成長のプロセス」がわかるように書く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼児の育ち(遊びへの取り組み)を記録する ・子どものどのような面(自己の育ち、生活の組み立て、遊びへの取り組み・言葉)がどのように育ったのか書く <p>③その中での子どもの育ちや必要な援助、また発達の課題となっていることなど発達の課題や援助がわかるようにかく</p>

(4) B2・B3 「遊び・活動の内容・育ち」「クラス集団の育ち」の振り返りと記録・自己評価の内容

Ⅲ-1・2・3 で述べてきた保育の振り返り・記録においては、B2・B3の項目についての記述は少ない。これは、個人記録はB1の項目の「個々の子ども」に焦点を当て、日々の保育日誌はA1,A2,B1

の項目「指導計画の評価」「保育者自身」「個々の子ども」に焦点を当てるため、クラスの中での「遊び・活動の内容」がどのように育ちつつあるのかということについての振り返りや記録には十分資することができないと考えられるからである。そのため、その時点の保育を振り返り、その遊びや活動が今後どのように展開していくか、クラス集団の育ちについて構想していくためには、Ⅲ-4「多様な記録用紙を用いての振り返りや記録のあり方」で述べた「エピソード記録・記述」「ウェブ型記録」「環境図型記録」を用いることが適切であろう。

IV-3 指導計画づくりに生かす保育記録のために一まとめにかえて一

保育者は、日々の保育の終了後にさまざまな記録を書くが、その基本になるのは園における日々の保育日誌である。日々の保育の実践は、指導計画およびその日の環境構成の中で行われるわけであるが、保育者はそこから基本的には「①子どもの遊びの姿(人とものかかわりの様子)」と「②保育者としてのかかわり」を振り返りつつ、Ⅲ-2に示したように「子どもの姿」「保育者の読み取り・対応」「子どもの反応」「保育者の考察」の流れで日誌を記録する。

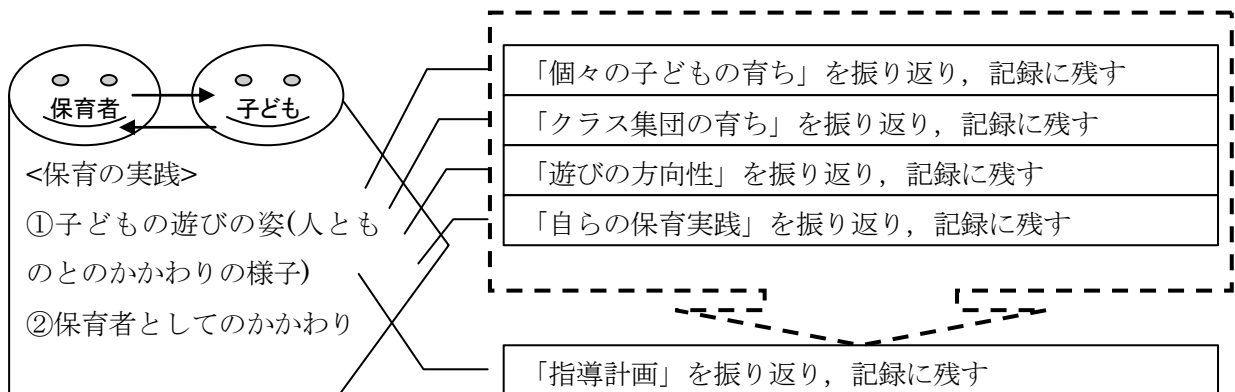


図5 指導計画づくりに活かすための保育の振り返りと保育記録の過程

図5のようにその日(週・月・・)の「指導計画」を振り返るためには、「個々の子どもの育ち」「クラス集団の育ち」「遊びの方向性」「自らの保育実践」の振り返りがあり、それに伴う記録がエビデンスとしてあるからこそ、「指導計画」に記述している「ねらい」「内容」「環境構成」等を振り返り、自己評価が可能である。そのような観点に立つと、「個々の子どもの育ち」は子どもの個人記録の積み重ねが必要であり、「クラス集団の育ち」「遊びの方向性」は、日案(週案・月案・・)に基づく振り返りや日々の保育日誌で意識的に記録に残す必要がある。さらに、「環境図記録」を用いることで、同時進行で多様な場所で行われている遊び・活動の空間的把握が可能になり、その後の遊び・活動の構想や保育環境の構想に資することができる。また「ウェブ型記録」を用いると、遊び・活動間の時間的・空間的なつながりが把握できる。そして、「エピソード記録・記述」を用いることで、そのできごと(エピソード)に関連した子どもたちを中心に保育者としてのかかわりがどうであったかを深く考察することができる。

それゆえ、まずは日々(少なくとも週単位)の「保育記録」「個人記録」を残し、それに指導計画づくりに生かしていこうという発想を持ち、さらに「環境図記録」「ウェブ型記録」「エピソード記

録・記述」等といった他の記録方法も用いてみることに繋がっていくことが必要であろう。

引用文献

- 1) 厚生労働省『保育所保育指針』2008, 厚生労働省『保育所保育指針解説書』2008
- 2) 文部科学省『幼稚園教育要領』2008, 文部科学省『幼稚園教育要領解説』2008
- 3) 2)の文献および無藤隆『幼児教育の原則』ミネルヴァ書房, 2009, p23
- 4) 文部科学省『幼児理解と評価(幼稚園教育指導資料第3集)』2010, p9
- 5) 秋田喜代美「振り返り, 課題を見つけ, 改善を図るサイクルを」『これからの幼児教育を考える(2009秋)』ベネッセ次世代育成研究所, 2009, pp1-5
- 6) 文部科学省『幼児理解と評価<幼稚園教育指導資料第3集(改訂)>』2010, p10, 15-16, 17-24, 44-49
- 7) 1)の文献, pp149-150
- 8) 寺田清美監修『保育所児童保育要録書き方ガイド Book』学研, 2009, および寺田清美編『すぐに役立つ保育の計画・記録・評価』フレール館, 2009
- 9) 増田まゆみ編『保育記録を生かした保育所児童保育要録の書き方』チャイルド本社, 2009, p13
- 10) 小田豊・神長美津子編著『教育課程総論』北大路書房, 2009, pp88-90
- 11) 神長美津子・塩谷香編『幼稚園幼児指導要録・保育所児童保育要録 記入ハンドブック』ぎょうせい, 2009, p13-14
- 12) 小田豊・青井倫子編著『幼児教育の方法』北大路書房, 2009
- 13) 阿部明子・中田カヨ子編『保育における援助の方法』萌文書林, 2010
- 14) 今井和子『保育に生かす記録の書き方(改訂版)』ひとなる書房, 1999, p88 および9)の文献 p13
- 15) 河邊貴子編『保育課程・教育課程論』東京書籍, 2009
- 16) 北野幸子編『乳幼児の教育保育課程論(シードブック)』建帛社, 2010
- 17) 鯨岡俊・鯨岡和子『エピソード記述で保育を描く』ミネルヴァ書房, 2009
- 18) 角尾和子編著『プロジェクト型保育の実践研究—協同的学びを実現するために』北大路書房, 2008, p14-15, 18
- 19) 河邊貴子『遊びを中心とした保育-保育記録から読み解く「援助」と「展開」-』萌文書林, 2005, p73-74, 78-81
- 20) 河邊貴子「明日の保育の構想につながる記録のあり方〜「保育マップ型記録」の有用性」, 日本保育学会『保育学研究』第46巻第2号, 2008, pp109-120
- 21) 河邊貴子・赤石元子監修『今日から明日へつながる保育』萌文書林, 2009, p146
- 22) 岡本拓子ら「環境図から保育マップへ-新しい保育記録の提案と実習指導へのいかし方-」日本乳幼児教育学会第17回大会ラウンドテーブル(企画・司会; 岡本拓子, 話題提供; 庄籠道子・新開よしみ・岡本拓子, 指定討論者; 河邊貴子), 2007, pp32-33

参考文献

- 阿部和子・前原寛編『保育課程の研究』萌文書林, 2009
- 小田豊・神長美津子編著『指導計画法』北大路書房, 2009
- 神長美津子『保育の基本と環境の構成』ひかりのくに, 1998
- 厚生労働省『保育所における自己評価ガイドライン』2009

久富陽子・梅田優子『保育方法の実践的理解』萌文書林, 2008

保育総合研究会編『新保育所保育指針サポートブック-保育課程から指導計画作成まで (PriPri ブックス)』世界文化社, 2008

保育総合研究会編『新保育所保育指針サポートブック II-指導計画・保育実践から自己評価まで (PriPri ブックス)』世界文化社, 2009

「保育プロセスの質」研究プロジェクト編(小田豊・秋田喜代美ら)『子どもの経験から振り返る保育プロセス』幼児教育映像制作委員会, 2010

¹ このようなことが近年再び議論に上るようになったのは、2008年の『幼稚園教育要領』の改訂やおよび『保育所保育指針』の改定や、学校教育法のもとで幼稚園における「学校評価」が導入され、保育所は福祉施設における「第三者評価」及び改定『保育所保育指針』に示されたように「自己評価」が義務付けられた影響によるものが大きい。日本保育学会では2009年の『保育学研究』第47巻1号において「保育実践を振り返る」という特集テーマが生まれ、同第47巻2号では「保育の質を高める記録」というテーマの誌上「保育フォーラム」が行われたり、同学会第63回大会(2010年5月)の大会企画シンポジウムの開催、それを受けての「日本保育学会会報」第149号(2011年1月5日発行)の「保育の質を高める記録」の特集が組まれている。

² くもの巣(ウェブ)型の計画については、阿部和子・前原寛編(2009)『保育課程の研究』萌文書林が詳しい。

³ 「保育マップ」という言葉は、庄籠(佐賀大学附属幼稚園)の描いていた「環境図記録」を、新開が「保育マップ」として命名し、自身の実習指導において学生に描かせたことから始まる用語であり、日本乳幼児教育学会第17回大会(2007)においてラウンドテーブルとして提案された記録方法である。保育現場では、以前から「環境図記録」が一部の保育者によって用いられ、河邊(2005)はその体系化を図り、本ラウンドテーブルにおいて指定討論者として登壇している。そのことも間接的に影響し、河邊(2008)では「保育を構想していくための新たな記録方法」として「保育マップ型記録」として新たな提案を図っている。